

【論文要旨】

北九州市立大学大学院 社会システム研究科

地域コミュニティ専攻

古藤 あずさ (2016M30002)

本論文では、マレーシア・サラワク州先住民クニャ (Kenyah) の焼畑陸稲栽培における儀礼の変容を、クニャが経験した二度の改宗と 1980 年代から 1990 年代にかけての村からの人口流出という二つの要因から分析し、変容の理由と現在まで継承されている儀礼の意義について考察を行った。調査者は、2015 年 7 月から 8 月、そして 2016 年 10 月から 2017 年 3 月の計 7 ヶ月の間、サラワク州先住民クニャの村落であるロング・モウ村に滞在し、聞き取りと参与観察によってデータを収集した。

クニャは焼畑陸稲栽培を生業とする民族で、アデッ・プ・ウーン (Adet Pu' un) と呼ばれる精霊信仰を宗教としており、稲作儀礼と伝統的な精霊信仰が深く関わっていた。しかし、1940 年代頃、サラワク内陸部にまで到達した基督教の広まりに対し、それまでの精霊信仰 (アデッ・プ・ウーン) を簡素化したブンガン教 (Bungan) を新たに創設することで基督教に対抗しようとした歴史を持つ。調査地のロング・モウ村においては、ブンガン教への改宗時期は定かではないが、1980 年代頃から出稼ぎで町へ出た家族を通じて基督教への改宗が進み、現在では 9 割以上の人が基督教徒である。

伝統的な精霊信仰とそれに伴う稲作儀礼の多くは、簡素化という言葉が示す通り、クニャ自らがブンガン教に改宗した際に多く失われたと考えられる。しかし、聞き取りからはそのうちのいくつかはまだブンガン教に改宗した後も行われていたが、その後の基督教への改宗でさらに衰退したことがわかった。

これまでクニャの研究は焼畑に着目した生業研究や、精霊信仰についての宗教的研究、首狩りや森林産物の交易などのために男性が行っていた移動慣行など多くなされてきた。しかし、基督教への改宗や近年の町への移住など、特に 21 世紀以降の社会変化とそれを経験した彼らの儀礼の変容を扱った研究はまだ多くはない。そこで本論文では、1920 年代までの精霊信仰の儀礼を詳細に記した宇野圓空の『マライシアの稲米儀礼』と筆者が調査地で得たデータを比較し、稲作儀礼の変容の様子について述べる。そこから、クニャが現在まで継承している儀礼や禁忌が持つ意義について明らかにすることを目的とする。本論では特に、基督教への改宗とクニャを初めとした先住民のコミュニティにとって身近であったサラワク州の町・ミリの産業発展に着目して論を展開する。

第一章では、研究の目的と調査方法について述べると共に、調査地であるロング・モウ村の地理や歴史、構成氏族、人口、経済、宗教、生業について説明する。この章から、これまで生業として行われてきた陸稲栽培が、現在は現金収入を基盤にした生業に変化し、経済力の格差が作業内容や畑地の選択に影響を与えるようになったことが明らかになる。また現金を得るのが容易ではない村の居住者の生活は、町へ出稼ぎに出た家族の仕送りなどによって支えられていることも指摘できる。

第二章では、本研究の位置づけのため、これまでになされた先行研究を紹介する。サラワク州先住民については、1950年代からFreemanに始まる焼畑研究・生業研究など多くの研究がなされてきた。ここでは、本論で主題となる焼畑陸稲栽培についての生態学的研究を振り返る。また東南アジアや日本の稲作民に共有される稲作儀礼の一つである「稲魂信仰」の概念について振り返る。そしてクニャの精霊信仰と、キリスト教が先住民社会に与える影響について簡単に説明する。

第三章では、人びとが村から町に移住することになった出稼ぎの背景について考える。この章では、出稼ぎという移動を伴う就業の背景に、サラワク先住民に多くみられる移動慣行という文化的側面があること、そしてクニャの生活の身近にあったミリという町が持つ特異な歴史があることを明らかにする。また新たな出稼ぎの形態として近年行われる海外出稼ぎについて事例を元にその現状について報告する。

第四章では、調査者が実際に現地で得たデータを元に、現在クニャがどのような形で焼畑陸稲栽培を行っており、そこでどのような儀礼がみられるのかについて紹介する。

第五章では、それまでのデータを統括し、稲作儀礼がブンガン教への改宗とキリスト教への改宗という二段階の改宗と、その後の人口流出による祭祀の担い手不足によって変容したことを明らかにする。

第六章では、変容の要因について考察を行うと共に、分析を統括し第七章への結論へと繋げている。調査で得たデータと、先行文献との比較を通して明らかにされたのは、稲作儀礼の変容はクニャ自身による儀礼の簡素化とその後のキリスト教の流入、そして出稼ぎに始まる人口減少によって引き起こされたということである。また、現在まで行っている儀礼は特に機能的な意味を持つものが残っている。その背景には、二度の改宗と村からの人口流出によってこれまで信仰の対象であった精霊に対するクニャの意識の変化があることが明らかになった。